街頭紙芝居にて（写真提供：川口さん）

「平野の町づくりを考える会」事務局担当

川口良仁（かわぐち りょうにん）さん

プロフィール

1947年、大阪市平野区生まれ。真言宗全興寺（せんこうじ）住職。80年、南海平野線の廃線に伴う平野駅舎保存運動をきっかけに、有志と共に「平野の町づくりを考える会」を結成。発足以来事務局を担当する一方で、毎週土曜・日曜日に同寺で開催される「あそび縁日」ではベーゴマを回し、第4日曜日には街頭紙芝居のおっちゃんに変身する。

「子どもたちの記憶に残る」町づくり

会長・会則・会費なしで25周年

大阪市の南東部に位置する平野。

戦国時代は集落の周囲に堀を巡らせて自衛する自治都市を形成しており、江戸期には河内木綿の集散地として栄えた。この街並みを生かして続けられているのが、「平野の町づくりを考える会」（以下「考える会」）が主体の、「町ぐるみ博物館」と呼ばれるユニークな町づくりだ。

地下鉄谷町線平野駅。4号出口から地上に出て南港通りを東に進むと、すぐに「和菓子屋さん博物館」の看板と出合う。店内には代々受け継がれている和菓子の道具を展示。予約すれば生菓子作りも体験できる。約200メートル先の道路向かい側には「自転車屋さん博物館」。天井から壁までを埋め尽くす自転車が圧巻。店主はこれまで約400種類の変り種自転車を自作している有名人だ。バス通りを北に向かうと、「駄菓子屋さん博物館」「平野映像資料館」「町屋博物館」など15館が碁盤目状の町割や古い町並みの中に点在しており、全館がオープンする第4日曜日には多くの見学者で賑わう。

「考える会」事務局の川口良仁さんによると、同会の発足は、1980年に南海平野線の廃線で平野駅舎が取り壊されることになり、住民有志が駅舎保存運動を起こしたことに始まる。保存運動は実らなかったが、「歴史ある町並みを保存するため、自分たちも積極的に関わろう」と、「考える会」が結成された。商店主、自営業、サラリーマン、僧侶、学生など約30人でのスタートだった。

3年後には、歴史ある町並みを見直す「町めぐりツアー」や、住民主演の「たそがれコンサート」を実現。92年には、消滅しかけていた杭全神社の「御田植神事」も復活させた。こうした流れの中で、「町ぐるみ博物館」は93年にスタートしている。「町並もだが、ひと目に触れず保存されている"モノ"も活用すれば」という会員の発想がヒントだった。

展示の一方で毎週土日にはベーゴマ回しなど昔の遊びができる「あそび縁日」や、第4日曜日の「街頭紙芝居」などで、子どもたちの遊べる場所も提供している。「豊かな時代なのに、子どもの遊びは貧しくなっています。今の親に昔の遊びがほとんど伝わっていない。これでは、子どもたちがふるさとと思える町にはなりませんから」との思いからだ。

ところで「考える会」はこの8月、発足25周年を迎える。長続きの秘訣を、「会が存続するためには、人事面がネックになるでしょ（笑）。そのため会長なし、会費なし、会則なしを通しています」。その上で、「"おもろい"ことを、肩肘張らず"いいかげん"に、お金が無いから"人のふんどし"でやる、くらいの気持ちでやること」と川口さん。

今後については、「町づくりを通して、切れかけているコミュニケーションをいかにつなげていくか。路地があってお地蔵さんがあってそこでみんなで遊んだと、子どもたちの記憶に残って、自分たちのふるさとやと思ってくれる町を残したい。それが僕らの勤めでしょうね」と話していた。

（文・脇本勤／表紙写真・高島悠介）